

肺動脈狭窄症の術後遠隔予後調査

東北大学 胸部外科 堀 内 藤 吾

昭和40年1月より51年12月までに教室で行った他の心奇型を合併しない純型の肺動脈狭窄症の手術例は1才～42才の28例であり、男女別では男12例、女16例であった。狭窄部位別では弁性狭窄21例、漏斗部狭窄2例、両者の合併3例、末梢肺動脈狭窄2例であった。

今回はこれらの症例のうち追跡調査可能な24人にアンケートを依頼したが、回収数は19人、回収率は79%であった。以下、調査項目別にその結果を述べる(表1)。

I. 現在の生活状況 (図1)

乳児、幼児には該当者はなく、学令者12名、職令者7名であった。

学令者の調査結果では、術後に発育がよくなったもの

8名、変わらないもの2名、悪くなったものは無く、記入しないものが2名であった。精神的、性格的に明るくなった、あるいは活発になったものが3名、変わらないもの4名、記入なしが2名であった。12名全員の在学中であり、小学校4人、中学校3人、高等学校1人、大学その他が4人であった。学校での体育を普通に行っているもの10人、激しい運動は休んでいるものが2人あり、その理由として苦しくなるため、あるいは先生に止められるため各1例であった。

次に職令者7名の調査では有職者は2人、無職で家事に従事しているもの2人、記入なしが3人であった。なお、有職者の労働内容は2人とも歩いたり動いたりする方が多い中等度労働であった。

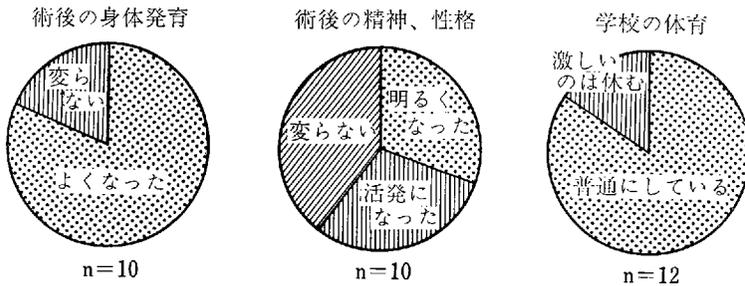


図1 現在の生活の状況(学童, 生徒, 学生)

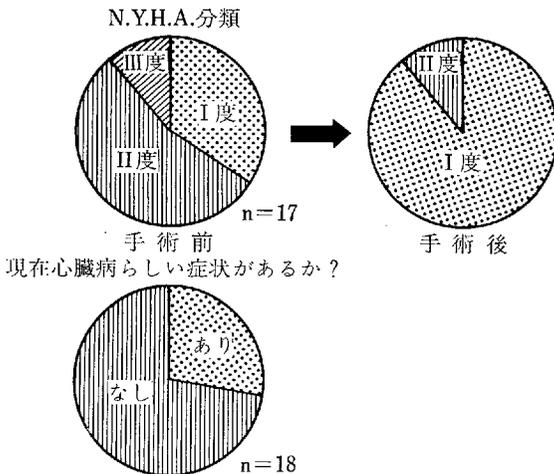


図2 現在の体の調子

II. 現在の体調 (図2)

術前の状態について解答したものは19例中9名であったが、NYHA分類のI度に相当するもの3名、II度5名、III度1名であった。術後の状態については18名が解答し、NYHA I度16名、84.2%、II度2名10.5%であった。

III. 心臓病らしい症状の有無 (図2)

症状があると答えたもの5名、なしと答えたもの13名、記入しないもの1名であった。症状の内容としては1人で数項目選択しており、動悸4、疲れ易い2、風邪にかかりやすい2であった。

表1 項目別全体集計

	計(名)	%		計(名)	%
I. 現在の生活状況			(4)	0	
C. 学 令 (該当者12名)			第1回目手術後		
i) 発 育			(記入なし)	1	5.3
イ) よくなった	8	66.6	(1)	16	84.2
ロ) 変わらない	2	16.7	(2)	2	10.5
ハ) 悪くなった	0		(3)	0	
(記入なし)	2	16.7	(4)	0	
ii) 精神, 性格			III. 現在心臓病らしい症状(該当者19名)		
イ) 明るくなった	3	25.0	症状 あり	5	26.3
ロ) 活発になった	3	25.0	なし	13	68.4
ハ) 変わらない	4	33.3	(記入なし)	1	5.3
ニ) 悪くなった	0		項目別 イ)	0	
(記入なし)	2	16.7	ロ)	4	
iii) 現在学校			ハ)	0	
イ) 小学校	4	33.3	ニ)	0	
ロ) 中学校	3	25.0	ホ)	2	
ハ) 高 校	1	8.4	ヘ)	2	
ニ) 大学, その他	4	33.3	ト)	0	
iv) 学校に			チ)	0	
イ) 行っている	12	100.0	リ)	0	
ロ) 行っていない	0		ヌ)	0	
v) 体 育			ル)	0	
イ) 普 通	10	83.3	IV. 手術の効果 (該当者 19 名)		
ロ) 激しいのは体む	2	16.7	イ) よくなった	13	68.4
(ロの理由)			ロ) 多少よくなった	2	10.5
ニ) 苦しくなるから	1		ハ) 変わらない	3	15.8
ホ) 先生(医)にとめられている	1		ニ) 悪くなった	0	
ヘ) その他	0		(記入なし)	1	5.3
(汗をかきカゼひき易いから)	0		V. 経過の変動	0	
(記入なし)	0		VI. 大きな病気		
D. 職業について (該当者7名)			イ) 輸血後肝炎	1	
i) 種 類			ト) 肺 炎	1	
イ) 有 職	2	28.6	チ) その他		
ロ) ついていない	2	28.6	VII. 結婚と妊娠 (該当者3名)		
(記入なし)	3	42.8	結婚 した	0	
ii) 仕事の内容			していない	1	
イ) 坐っている	0		前からしていた	1	
ロ) 坐ったり歩いたり	0		(記入なし)	1	
ハ) 歩いたり動いたり	2		妊娠 した	0	
ニ) 激しい労働	0		しない	1	
II. 現在の体調 (該当者19名)			IX. 薬 (該当者19名)		
手術前 (記入なし)	10	52.6	イ) のんでいる	0	
(1)	3	15.8	ロ) のんでいない	17	89.5
(2)	5	26.3	(記入なし)	2	10.5
(3)	1	5.3			

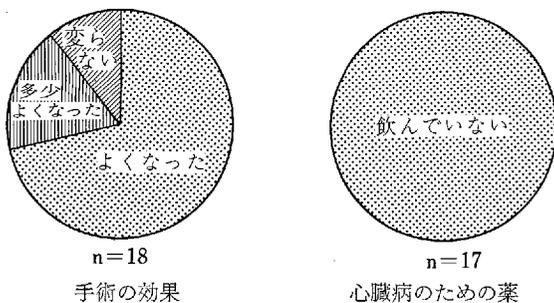


図 3

表 2 アンケート調査結果

調査対象	24人
回収数	19人
回収率	79%

(昭和40年1月～昭和51年12月)

IV. 手術の効果 (図3)

18名が解答しており、術前と比較してよくなったもの13名68.4%、多少よくなったもの2名、変わらないもの3名であった。

V. 手術後の経過変動：解答なし

VI. 退院後の大きな病気

2名が血清肝炎あるいは肺炎に罹患した。

VII. 結婚と妊娠

該当者が3名あり、2名が解答した。術後結婚したものはなく、していないもの1名、手術前からしていたものが1名であった。また、術後妊娠したものはなかった。

VIII. 心臓病のための薬 (図3)

17名が解答し、全例がのんでいないと答えた。

以上の結果を総合すると、症例数は少ないが、全体の約80%が程んど無症状に改善しており、手術の効果があつたと判断される。特に、学令児においては発育は良好で健康児と程同様の生活をおくっており、約半数が精神・性格的に明朗、活発になったと積極的に答えているのが特徴的である。しかし、日常生活には支障がないものの、何らかの症状が残存するものが数名みられ、これらの症例についてはその原因を精査する必要があると考えられる。

心内膜床欠損症手術例の術後長期予後調査

東北大学 胸部外科 堀 内 藤 吾

I. 対象ならびに方法

本調査の対象は、昭和50年12月末までに東北大学において手術をうけ、生存退院した心内膜床欠損症34例である。調査は厚生省班会議作成の予後調査表を用いたアンケート方式によつた。34名中、アンケート応答者は29名で、回収率は85%であった。29名をさらに類型別に分けてみると、I型20例、II型2例、III型7例となった(表1)。男女比は、男子9例、女子20例で、年齢群別では、幼児1、学齢者18、有職業年齢10例となった。

II. 結 果

I. 現在の生活の状況

A. 学童、生徒、学生

身体の発育は68%で改善、31%で不変であった(回

表 1 アンケート調査結果

分類	I 型	II 型	III 型	計
調査対象	25人	2人	7人	34人
回収数	20人	2人	7人	29人
回収率	80%	100%	100%	85%

答率89%)。術後の精神・性格は40%で明るくなり、20%で活発となった(回答率83%)。学校の体育は47%が普通に行なっているが、18%は不参加である(回答率100%)。(図1)これを類型別にみると、身体発育、精神・性格の面で差異はないが、体育を普通に行なっているものはI型の60%に対し、III型は20%であった。尚Down症候群を伴うIII型1例は就学していない。

B. 学校を卒業し、職業につく年齢の者

↓
検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります
↓

昭和40年1月より51年12月までに教室で行った他の心奇型を合併しない純型の肺動脈狭窄症の手術例は1才～42才の28例であり、男女別では男12例、女16例であった。狭窄部位別では弁性狭窄21例、漏斗部狭窄2例、両者の合併3例、末梢肺動脈狭窄2例であった。

今回はこれらの症例のうち追跡調査可能な24人にアンケートを依頼したが、回収数は19人、回収率は79%であった。以下、調査項目別にその結果を述べる(表1)。